

『方便から真実へ 浄土真宗』より抜粋

238 信前しんぜんと信後しんごとはどこで分別ぶんべつ、区別くべつをするのですか。

解説Ⅱこれは第十八願がんの成就文じょうじゅもんを体験たいけんした人ひとにのみ語かたられる、極意ごくいであります。これは学問がくもんでもなければ理屈りくつでもない、実地じつちに凡智ぼんちがつきて仏智ぶつちを体験たいけんさしていただいた、不思議ふしぎの境地きょうちに入はいった人ひとのみの語かたられる世界せかいであります。

信前しんぜんとは、凡智ぼんちの計はからいのやまない、無明むみょうの闇やみを闇やみとも知しらないで計はからうて、死後しごの往生おうじょうを樂たのしんでありがたがっている境地きょうちであり、信後しんごとは、思慮分別しりよぶんべつがつきて、親おやに計はからわれて明み信しん仏智ぶつちの大自覚だいじかくを得えた後のちをいうのであります。

信前しんぜんとは、自分じぶんの機きを抜ぬきにして法ほうをありがたがっているときであり、信後しんごとは、逆謗ぎやくほうの屍しかばねが撰取せんしゅされた一刹那せつないご以後をいうのであります。

信前しんぜんとは、三毒どくの煩惱ぼんのうは往生おうじょうの邪魔じゃまにならないと落ちついておれるときであり、信後しんごとは、無常観むじょうかんと罪惡観ざいあくかんに攻めたてられて三定死さんじょうしの境地きょうちに立たって、実機じつきが救すくわれた後のちであります。

信前しんぜんとは、自分じぶんは宿善しゆくぜんが厚あついから助たすかっていると自惚うぬぼれている間あいだであり、信後しんごとは、難中なんちゅうの難なんを突破とつぱさしていただいて、懺悔さんげあるのみの世界せかいであります。

信前しんぜんとは、法ほうを見みて安心あんしんしている境地きょうちであり、信後しんごとは、この機きが摂取せつしゆされて満足まんぞくしている境地きょうちであります。

信前しんぜんとは、信前信後しんぜんしんごの水際みずぎわの立たたない人ひとであり、信後しんごとは、鮮あざやかに信前信後しんぜんしんごの語かたれる人ひとであります。

信前しんぜんとは、未来みらいを喜よろこぶ人ひとであり、信後しんごとは、現在げんざいを喜よろこぶ人ひとであります。

信前とは、後生の一大事といいながら、ちよつとも真剣にならない人であり、信後とは、前滅後生に驚いて今開発し苦抜けした人であります。

信前とは、成就の文を読んで理解して落ちついておれる人であり、信後とは、言葉の理解でなく、親の念力を体験して大慶喜をした人であります。

成就文の話を聞いてありがたがっているのは、観念の遊戲ですよ、ほんとうに信心歓喜しましたか。一念とは信樂開発の時刻の極促を顕し、廣大難思の慶びを彰わすと教えてありますが、聞即信の一念で五十二段を超証さしていただくのですが、あなたの機は晴れて満足していますか。理解は信仰ではありませんよ、素直にきいているのは感情ですよ、久遠劫から流転をしている実機は表には出ていませんよ。秘密の部屋で昼寝をしていますよ。三毒の煩惱のような簡単なものと思っっていますか。絶対の法を何十年聞かされても絶対の機が顕れていないから、一体になっっていないのですよ。一体になっっていないから、摂取されてはいな

いのです。成就文は、聞即信の一念で信順した者は救われると法が成就したのであって、あなたは信順したのでなく合点したのだから、摂取されてはいないのですよ。成就の文から洩れているのが、あなたの本性の逆謗の屍ではありませんか。除かれているのですよ、その機があわてたときでなければ、あなたの信仰にはなりませんよ。逆謗の屍とは五逆と謗法と闡提、闡提を無信と訳し、脈があがっているから屍というのです。地獄と聞かされても、痛くもなければ痒くもない、極楽と聞いても、ありがたくもなければ嬉しくもない、合羽が水をはじいているのと同様で、驚きを立てないから難化の三機、難治の三病というのです。それがあなたの自体であるけれども、素直に聞いていると頭にのぼっているから、自分のことだと気がつかないのです。光明無量に照らし抜かれて唯除逆謗と捨てられたのが私であつたと捨てられた人が、寿命無量の慈悲の極致の若不生者不取正覺に生かされたのが、至心信樂已を忘れた大慶喜をするのです。それを成就の文に、至心に廻向したまえり、誰

に廻向えこうしてくださったか、諸もろもろの衆生しゅじょうに、諸もろもろの衆生しゅじょうの腹はらわたしは逆謗ぎやくほうの屍しかばね、それに、至心ししんに廻向えこうしてくださった、何をなに、法体ほつたいの太行だいぎようの名号みようごうを、同時どうじに当果決定とうかけつじようを、名号みようごうを聞き開きひらいたと同時にどうじ未来みらいの往生おうじようまで廻向えこうしてくださった、聞即信もんそくしんの一念いちねんに即得往生そくとうおうじようさしてくださると知しったのが、信前しんぜん、くださって飛び上とあがって大慶喜だいぎようきをしたのが、信後しんごです。自分じぶんの罪業深重ざいごうじんじゆうを見ていない人は、曇たための上うえの水練すいれん、机上きじようの空論くうろん、観念かんねんの遊戯ゆうぎで、なるほどと理解りかいしただけですから、信前しんぜんというのです。实地じつちに生死しじうの苦海くかいに投げ込まれた実感じっかんがあつたか、ほんとうに九死きゅうしに一生いっしようを得た人ひとなら大慶喜だいぎようきするのです。後生ごしようが一大事いちだいじになつて三定死さんじようしの境地きようちに立つた人ひとが、我能われよく汝なんじを護まもらんの勅命ちよくめいが五臓六腑ごぞうろつぷを貫つらぬいたとき、天地てんちが転倒てんとうするほどの大慶喜だいぎようき、ふたたび迷まよわぬ身みにさしていただいた大自覚だいじかく、聞即信もんそくしんの一念いちねんで十方世界じゅうほうほうかいの功德くどくを全領ぜんりようさしていただいたのですから、凡智ぼんちがつきて仏智ぶつちに生いかされているのです。鮮あざやかも鮮あざやか、これほど鮮あざやかなものはないから明信みようしん仏智ぶつちといい、いまこそ明あきらかに知しられたりと仰おほせられたので、

一念いちねんの信しんを諦得たいとくさしていただいた人ひとが、信前しんぜん信後しんごの水際みずぎわが立つたのです。立たない人ひとは、信前しんぜんにいる人ひとです。

『昭和の歎異抄』より抜粋 273頁

真しんとは真実しんじつ、本物ほんもの、如実にょじつの信しん、信後しんごの味あじ、第十八願がんの他力たうりき不思議ふしぎの信しんということで、仮けとは、権仮ごんけ、方便ほうべん、贗物にせもの、真似まね、不如実ふにょじつの信しん、信前しんぜんの味あじということで、第二十願がんの信仰しんこうということです。

分際ぶんざいとは区別くべつ、分別ぶんべつ、たてわけ、水際みずぎわ、角目かどめ、境目さかいめということ、第十八願がんの信しんと第二十願がんの信しんは、法ほうは他力たうりきの名号みょうごうですけれども、機きの見方みかたが違ちがうのです。照てらし出でされて逆謗ぎやくぼうの屍しかばねが

自分であつたことに驚いて、黒血を吐く思いで求道し、火原の中をさ迷うて往生の望みの絶えた劣機が自分であつたと投げ出した機が、第十八願の正所被の機で、自分は素直に聞いていると自惚れて、実地の求道を他人にさして、実機を包んでいて、死んだらお助けと思つてゐるのが、第二十願の相手の機です。

言葉を変えて言えば、第十八願の方は極悪最下の実機が、信楽開発さされて、明信仏智の無我の信仰が諦得できた信後のことであり、第二十願の方は素直に聞いていると実機を包んで、疑いを疑いと知らないのですから疑惑仏智で、ありがたい真似をしている贗物の信仰ですから、この世で往生の解決がついていないから、この世ではどうもなれない、死んでからお助けと言つてゐるのです。晴れてはいないけれども、永年聞かされて理屈が判つてゐるから、何時とはなしに晴れたつもりでゐるから、真仮の分際はいつとはなしにえられると言つてゐるのです。しかし、真がわからないのに仮がわかるはずがなく、仮のわからないのに真

のわかるはずがないから、聖人は「真仮を知らざるによりて如来広大の恩徳を迷失する」といわれたのです。

『廣大難思の大慶喜』より抜粋 165頁

真仮の水際の立たないのが二十願

名号を眺めているのが方便の第二十願で信前の機、名号と一体になったのが真実の第十八願の信後の機である。方便から真実に入るのが真似から本物、贗物から本物、調熟の光明から摂取の光明に生かされるので、初めから真実の者はいません。方便にいる間は真実は判らないのです。真実に入ってこそ 長い冥路を迷うていた事が判るのです。方便とは、他力廻向と言いながら凡夫の計らいがやまないのですから、いくら他力のように説明して贗てみ

ても、じしんこんりゆう 自心建立の心いきの域はなを離れることが出来できないのであります。

174頁

真宗しんしゅうでは機きの見方みかたが足りたりないのです。心こころの中なかにどんな化け物ばものが隠かくれているか、ご承知しょうちですか。それが臨終りんじゅうでなければ見えてこないのです。その厄介やっかいな心こころの古狸ふるだぬきを、元氣げんきな達者たっしやな間あいだに照らし出だしてもらって、弥陀みだの利剣りけんで退治たいじしてもらえ、というのが平生へいぜい業成ごうじやうというのですよ。平生へいぜいとは臨終りんじゅうではない、達者たっしやな元氣げんきな間あいだ、業成ごうじやうと業事成ごうじじやうべん弁べんという専門語せんもんごだから、私わたしが説明せつめいすれば一大事業だいいじぎやうが完成かんせいする、望みのぞが叶かなう、大事業だいいじぎやうが達成たっせいできる、ということです。人間にんげんは無む限げんの欲望よくぼうがあるから、満足まんぞくを知らしない。金かねでも、名誉めいよでも、地位ちいでも、有ればあるほど欲よくをおこす。それが一場いちじやうの夢ゆめにすぎないのです、そらごと戯言たわごとに氣きがついた時ときは、つぎの世界せかいに出でているのです。早くはや精神せいしん的てきの大満足だいまんぞくを得えて、人生じんせいに受生じゅしやうした有意義ゆういぎな生活せいかつをせよと
いうことです。

人間は、樂を求めながら苦しんでいるのです。光に向いて進めば、物質の影法師はついて来るのです。光を背にして、物質や名利の影法師を追えば追うほど、走れば走るほど、まだ足りない、まだ足りないと追わねばならないのです。その根本は、無明の闇の心にあるのです。秘密の部屋にがんばっている化け物は、真宗で教えている三毒の煩惱のような簡単な代物ではありませんよ。十八願から洩れた代物が五逆、謗法、闍提、邪見、憍慢、弊、懈怠、私が調べただけがこの七つですが、こんな心はたびたび説明していますから、今は略します。こんな心のあることさえも知らず、素直に聞いていると平氣でいるのですから、宗教を聞く器ではないのです。絶対の機が照らし出されていなければ、絶対の法とピントが合わないから一体になれないのです。

機を見るのを嫌うのが二十願の人で、真実の機が照らし出されて名号と一体にさしていただいたのが、第十八願の行者です。真実の機とは、真実に二通りがあります。仏の真実は

眞実が眞実、凡夫の眞実は嘘が眞実です。凡夫の眞実は、眞実のないのが眞実です。絶対の
不実が知らされた人でなければ、仏の眞実に救済された慶びはありません。実機を知らない
のが、自惚れ強い第二十願の信前の贗物の信仰です。